

## 第4回 金沢城二の丸御殿復元整備専門委員会

開催日 令和5年11月21日（火）

場所 石川県庁1109会議室

### 会議結果（主な意見）

- ・文化庁との協議に向けて、今回復元する建物だけでなく、外構や今後の復元部分など全体像を示していくことが重要との意見があった。
- ・埋蔵文化財調査について、今年度の調査により石製の排水柵や唐門の角度など新たな知見が得られており、排水柵の復元や、唐門の表示について検討するべきとの意見があった。
- ・正面から見る玄関は見どころの一つ。動線など見せ方について今後検討が必要との意見があった。
- ・復元整備設計について、耐震補強や防火設備、バリアフリー等について事務局から説明し、設計方針について概ねの了解が得られた。

### 会議資料（抜粋）

- ・別紙

# 第4回 金沢城二の丸御殿復元整備専門委員会

時：令和5年11月21日（火） 13:30～16:00

於：石川県庁 第1109会議室

---

## 次 第

1 開会 開会挨拶

2 議事

（1）報告事項

（2）取り組み状況

- ・埋蔵文化財調査
- ・復元整備設計
- ・障壁画および彫刻欄間の制作に向けた検討状況

（3）その他

3 閉会

## 埋蔵文化財調査

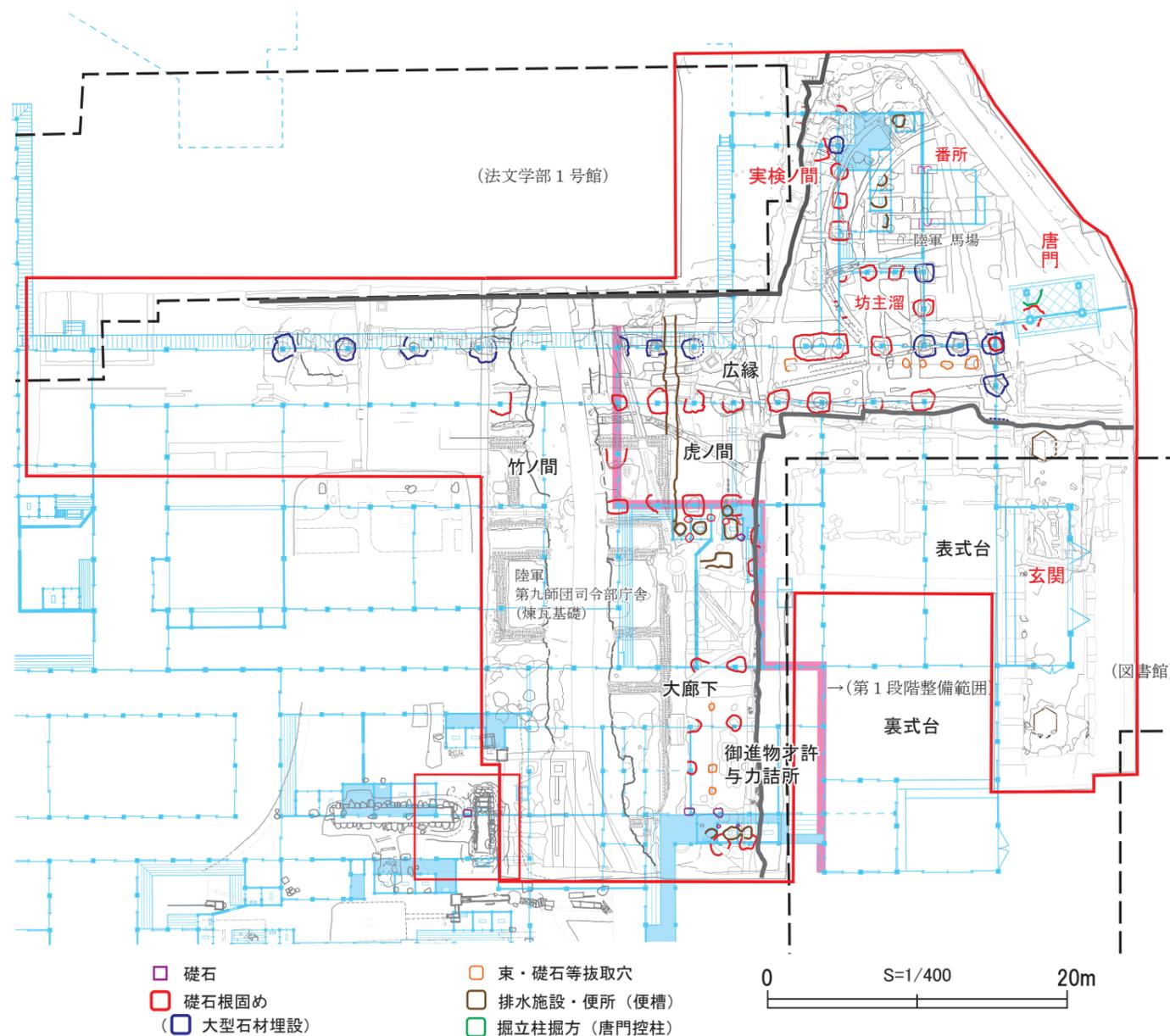
### 1. 概要【第1図～第3図】

・令和2～4年度にかけて、式台北・実検ノ間・虎ノ間・広縁（第1段階整備範囲）等を対象に調査を実施した結果、大学施設等により失われたものを除き、江戸後期（1808～1869）の御殿建物の主要な柱を支える礎石根固めを確認した。

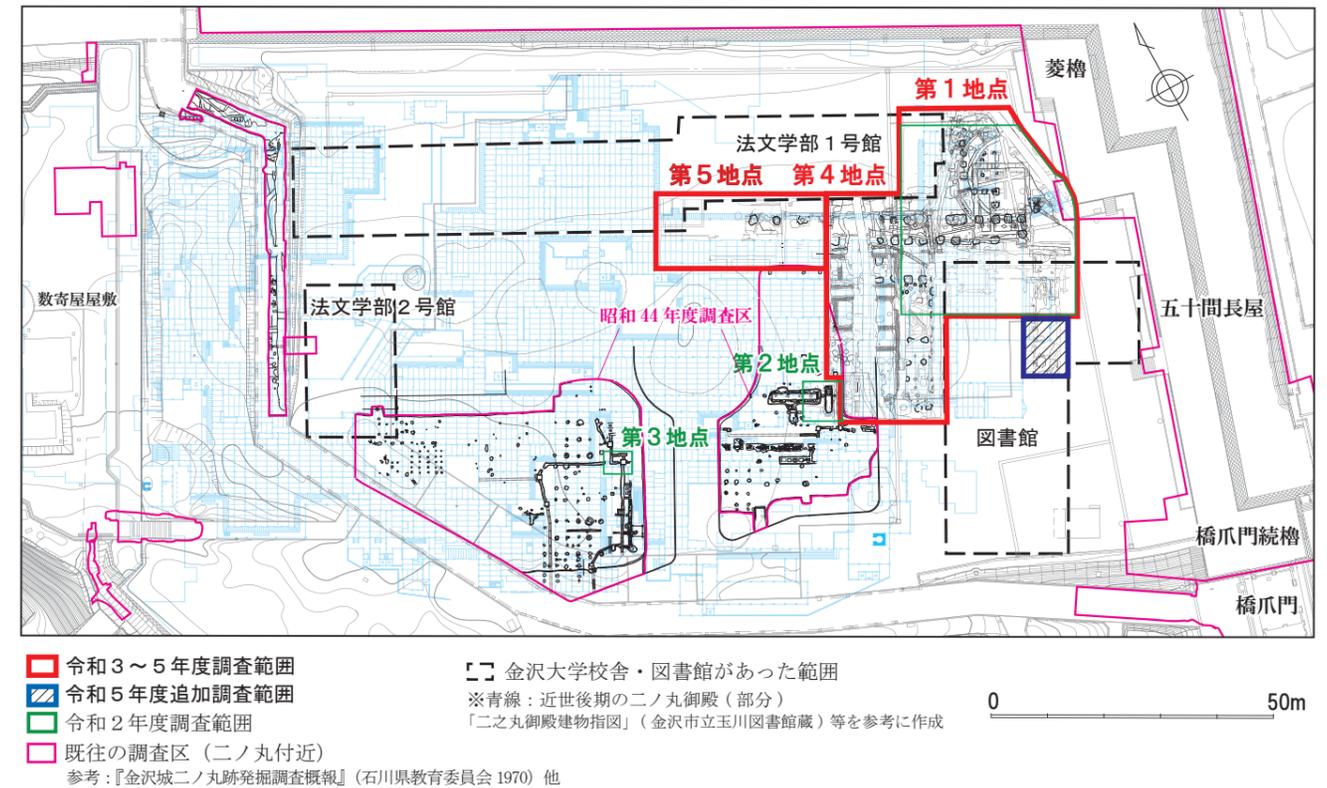
・これらは表式台から虎ノ間・竹ノ間へと延びる広縁両側、虎ノ間の西～南側、実検ノ間及び坊主溜にかけての柱列に対応しており、御殿北東部の建物の位置が特定された。

※第1段階整備範囲の柱数92本のうち、礎石根固めにより柱位置を特定した箇所42、金沢大学校舎等で削平されている箇所50。

・令和5年度は、唐門・玄関・実検ノ間・坊主溜周辺を対象に遺構の精査を実施し、唐門の基礎遺構、玄関脇の枡（水溜）等について、位置や形状・構造等を確認した。



第2図 遺構平面図



第1図 二ノ丸調査区等配置図



## 2. 唐門【第4図～第12図】

・唐門は、明治3年（1870）に卯辰山招魂社に礎石を含めて移築され、その後、昭和38年（1963）に尾山神社に移転し、東神門として現存している（第4図・第5図）。

・今回の調査では、明治3年まで建っていた唐門の西側本柱・控柱の基礎（東側は大学共同溝により削平）、付随する掛塀（門両脇から御殿建物及び五十間長屋下折曲部石垣に取り付く）の基礎を検出し、唐門の位置を特定した（第6図・第7図）。

・本柱については、礎石抜取穴（礎石は移転先に遺存）・礎石根固めを確認した。礎石根固めは長辺約1.9mを測る（第7図）。

※礎石は坪野石（溶結凝灰岩）製で平面八角形を呈する（第5図）。

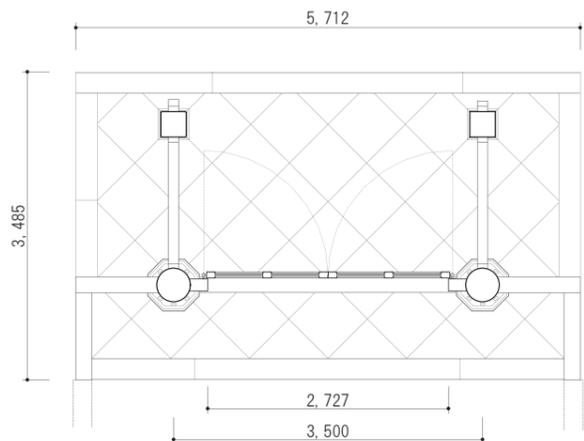
・控柱は掘立の構造であり、抜取穴の形状・規模から約30cm四方の柱と推定でき、柱穴下部（文化御殿面から約1m下）に戸室石の根固めが認められる。また掘方は釉葉瓦を顕著に含み、御殿玄関脇の枡の掘方の構造と類似する（第8図・第9図）。

※現存する移築後の唐門の控柱は礎石を伴っている。

・掛塀については、西側（御殿側）では基礎とみられる延石、東側では五十間長屋石垣への基礎取付加工痕を確認した。これらから唐門及び掛塀は、御殿の軸に対し斜交していたことが明確となった（第10図～第12図）。

・検出遺構・現存遺構・絵図（宝暦年中出来金沢御城御造営方建絵図）記載の寸法は下記の通りであり、おおよそ合致している。

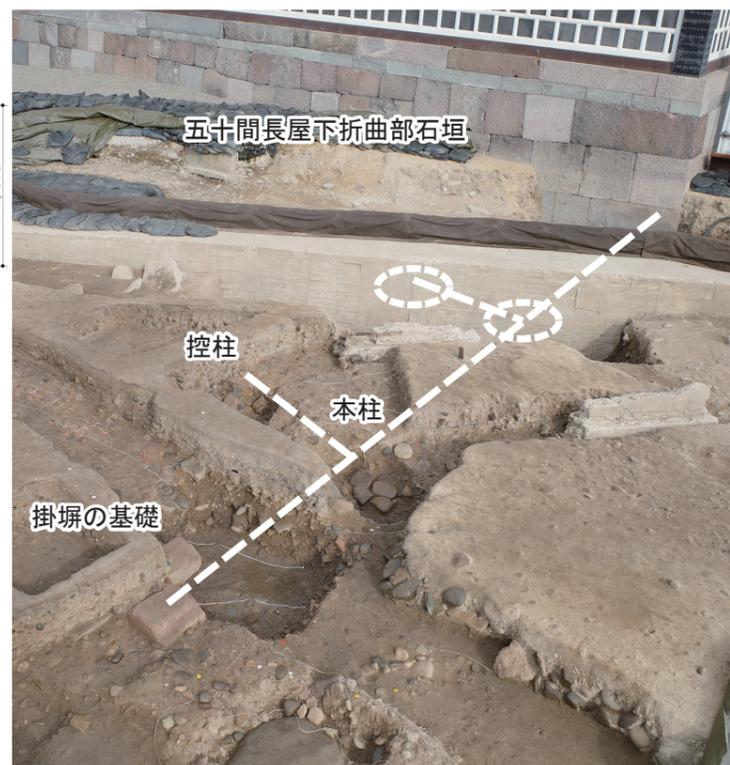
	検出遺構	現存遺構	絵図
本柱－控柱間（内寸）	約1.5m	1.51m	5尺（1.51m）
本柱径	不明	36cm	1尺3寸（39.39cm）
控柱一辺	33～34cm（抜取穴）	28cm	1尺四方（30.3cm）



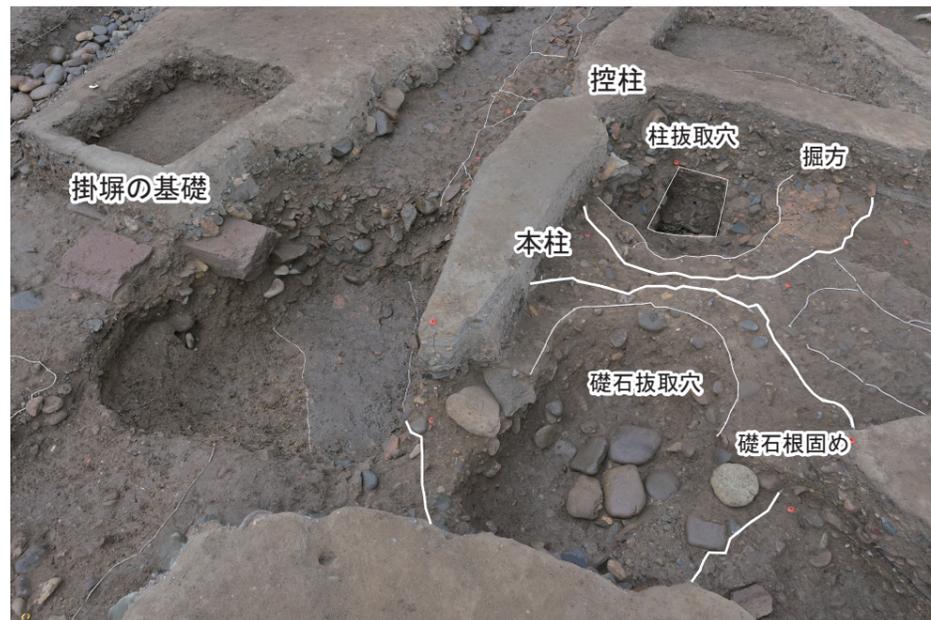
第4図 唐門（現存建築遺構）平面図（1/80）



第5図 唐門（現存建築遺構）礎石



第6図 唐門付近の遺構（南西から）



第7図 唐門 本柱・控柱の基礎遺構（南から）



第8図 控柱抜取穴（本体反映部分）



第9図 控柱根固め（戸室石）

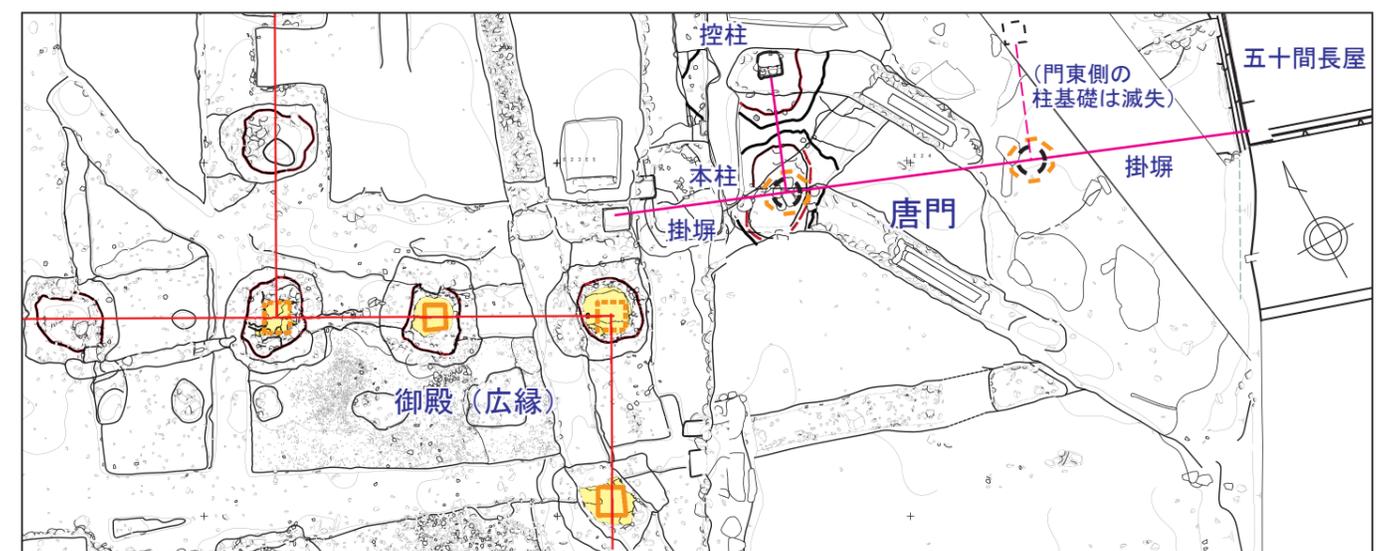


第10図 掛塀の基礎（南西から）



第11図 五十間長屋下折曲部石垣下部の状況（西から）  
掛塀基礎の取付痕

門から延びる掛塀は、戸室石付近で南に折れ曲がり御殿建物に取り付く。奥の延石は文化再建より前の塀基礎。



第12図 唐門・御殿等の位置

### 3. 玄関脇の枡（水溜）【第13図～第19図】

- ・ 玄関の両脇で、平面六角形の枡（水溜）を確認した（第13図～第15図）。金沢大学図書館建設により枡の上部は失われていたが、最下段（一部上段部の残欠がみられる）が遺存していた。石材は越前笏谷石の板石材が用いられている（第16図・第17図、参考史料）。
- ・ 枡の深さは、文化再建御殿の面から底石上面まで約1.3mを測り、板石の規格から三段構成であったと考えられる。
- ・ 枡内部は、土砂や3cm程度の玉砂利で埋められており、銅瓦、板材等の建築部材、火鉢・碗等の土器・陶磁器類やガラス製品が出土している（第18図・第19図）。
- ・ 廃絶時期は、出土遺物の様相から明治初期以降で、明治14年の火災より前と考えられる。



第15図 枡（水溜）全景（南から）



第16図 玄関南側の枡（水溜）（東から）

- ・ 内寸で南北195cm、東西143cmを測る。
- ・ 掘方は建物が面しない東側・南側が広く、土だけでなく釉薬瓦が入れ込まれている。



第17図 玄関北側の枡（水溜）（東から）

- ・ 内寸で南北193cm、東西140.5cmを測る。
- ・ 使用石材、掘方の様相は南側とほぼ同様であるが、側石東西辺の上面は相欠となっている。



第18図 遺物出土状況  
玄関北側の枡（水溜）内部から、銅瓦、板材、火鉢、陶磁器等が出土



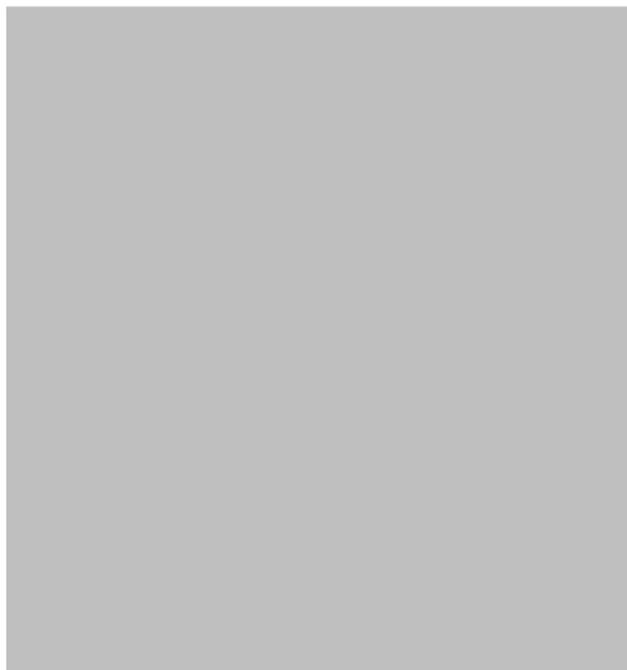
第19図 出土した銅瓦  
直径15cm、銅板の厚さ1mm弱

<p>文化七年五月十九日</p> <p>一、拾八匁 表御式台前水溜切合等手間、能美や喜兵衛</p>	<p>文化六年十一月四日</p> <p>一、式拾目 御式台前水溜石、越前八角仕合、樋石等取替</p>	<p>文化六年六月廿五日</p> <p>（建尚・遊覧方内作事奉行） 一、先達而金谷佐大夫江申談候竹ノ御間等葛石等しらへ、書出有之、左之通り、 （中略）</p> <p>（戸室） 一、拾六本 同長三尺、大サ六寸二七寸 表御式台前水溜縁 （中略）</p> <p>（越前） 一、百七拾六枚 同長三尺、幅一尺五寸、厚二寸五歩 内 四拾枚 表御式台廻砂留五つ分 六十四枚 御小書院廻り、同断、八つ分 七拾二枚 御式台廻り水溜二つ分</p>
---	--	---

参考史料 「御造営日並記」 水溜関連部分

#### 4. 便所遺構【第16図～第19図】

- ・実検ノ間東側で略円形の土坑4基を確認した。「二之丸御殿建物指図」に描かれる便所の位置と整合する。そのうち1基の便槽には、据え置かれた桶の残欠が認められた（第17図・第18図）。
- ・土坑内部は、川原石・釉薬瓦・陶磁器等を入れているもの（第18図）、多量の砂（第19図）で埋めているものがみられた。前者には炭粒や焼土が認められず、明治14年(1881)火災より前に廃絶したと考えられる。後者は炭粒や焼土を含み、火災以後に廃絶したと考えられる。



第17図 便槽検出状況（絵図①に対応）（北から）



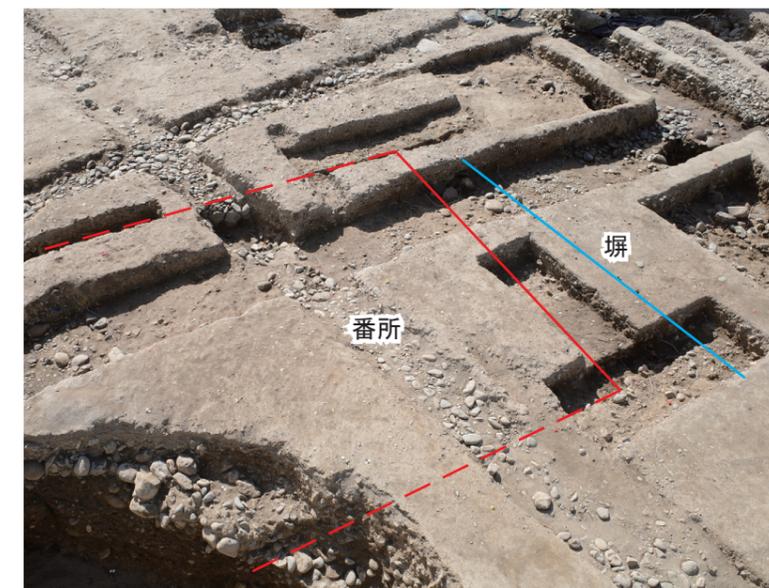
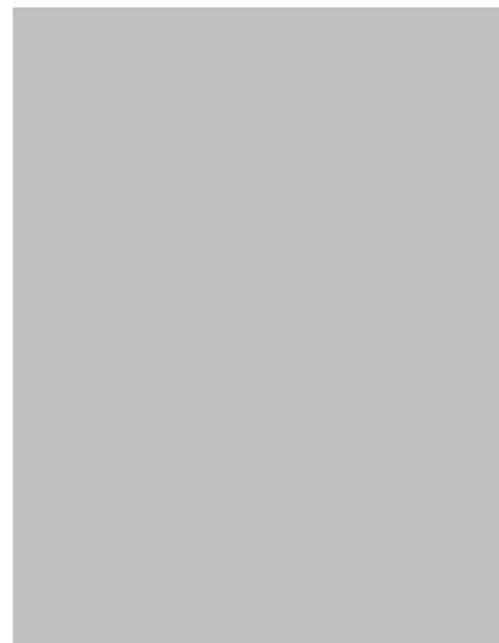
第18図 便槽埋土掘り下げ状況  
（絵図①に対応）（北から）  
便槽に使用した桶の残欠を検出



第19図 便槽埋土掘り下げ状況  
（絵図②に対応）（南から）  
便槽内部は砂で埋められ廃棄

#### 5. 番所・堀【第20図・第21図】

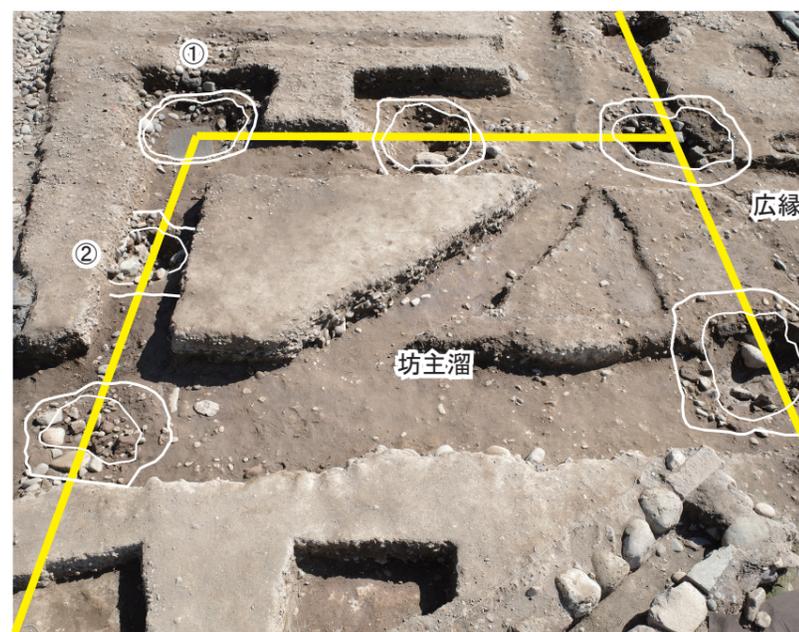
- ・番所は1間×1間（絵図によっては1間×2間）の建物であり、柱痕跡は西柱列（北西隅と南西隅）で確認した。小穴は直径48cm、深さ10cm程度と浅く、埋土の観察から礎石採取穴と考えられる。東柱列は、金沢大学共同溝設置等により削平されている。
- ・堀（熨斗立）は、絵図によると坊主北東隅から北に約10m延長し、西に折れて実検ノ間に取り付く。調査では、延長（検出範囲）4.1m分、幅54cmの溝状遺構を確認した。堀の基礎部に該当すると考えられる。



第21図 実検ノ間東側の番所・堀に関する遺構（北から）

#### 6. 坊主溜【第22図～第24図】

- ・坊主溜東辺～北辺の礎石根固め4箇所について、大型石材埋設タイプ1基と川原石充填タイプ3基を確認した。大型石材埋設タイプは北東隅の柱の基礎に相当する（第22図①・第23図）。礎石は採取されて遺存していないが、整形した切石材の礎石が置かれたと考えられる。



第22図 坊主溜の礎石根固め（西から）



第23図 ①大型石材埋設タイプ（北から）



第24図 ②川原石充填タイプ（南から）

## 障壁画の制作に向けた検討状況

### 1) 趣旨、調査・検討体制

#### 障壁画制作の趣旨

御殿の障壁画は、豪華絢爛な建築を特徴づける装飾であるとともに、儀礼等において藩主の威厳を高める舞台装置としての役割を有するなど、往時の文化や芸術、御殿の機能を理解するうえで重要な意味を持つものである。

建築物と合わせた障壁画の復元は、単に美術絵画を制作展示するものではなく、御殿の機能や障壁画の役割への理解に資することを目的とするものであり、これにより来訪者は、御殿空間をより臨場感を持って体感することができ、御殿復元の効果を高めるものである。

建築物と合わせた障壁画の復元にあたっては、史料から明らかになる題材、作者、仕上げなどの情報を参考に類例から意匠を推定するなど、史実を尊重した方法により制作することを基本方針とする。また、制作した作品が、当時描いた絵師の作品であるという誤解を生むことのないよう留意する。

#### 調査・検討の体制

障壁画の制作に向けた検討は、学識者による絵画史的な検討だけでなく、制作技術の面においても往時の技法や、現代において再現しうる技術や材料面の検討が必要となる。このため、障壁画の模写や修理監修の実績を持つ学識者や、熊本城や二条城において障壁画制作や模写に携わる制作技術者を交えたワーキンググループ体制のもと、資料調査や現地調査等を実施している。

#### 障壁画の検討体制

氏名	所属等	専門分野、役職等
小嶋 善通	成安造形大学教授（学長） （金沢城二の丸御殿復元整備専門委員会委員）	専門：近世絵画史 役職：京都御所障壁画修理指導 二条城二の丸御殿障壁画模写事業指導 文化庁文化審議会文化財部会第一専門調査会委員
荒木 恵信	金沢美術工芸大学教授 （金沢城二の丸御殿復元整備技術アドバイザー）	専門：日本画、文化財保存、模写、絵画材料・修復 役職：石川県文化財保存修復工房運営委員 実績：平等院鳳凰堂板壁絵復元模写
中澤 菜見子	石川県立美術館学芸主任	近世絵画史
中村 真菜美	石川県立歴史博物館学芸主任	近世絵画史
事務局	石川県土木部公園緑地課金沢城二の丸御殿復元整備推進室 検討業務受託者：（有）川面美術研究所（二条城、京都御所障壁画模写、熊本城障壁画復元）	

### 2) 制作（図様推定）の方法

表向の障壁画の図様を図により示す資料は確認されていないが、文献資料や類例となる作品等から得られる情報に基づき図様を推定する推定復元を行う方針であり、当該絵師の作品や系列絵師の同画題作品などを調査し、絵師や流派の特徴について検討を深めることで精度を高める。

復元整備対象となる表向の主要部には、ほぼ全域にわたり障壁画が見られるが、障壁画の制作には長期間を要することから、推定復元の範囲、順序について建築計画との調整を図りながら取り組みを進める。

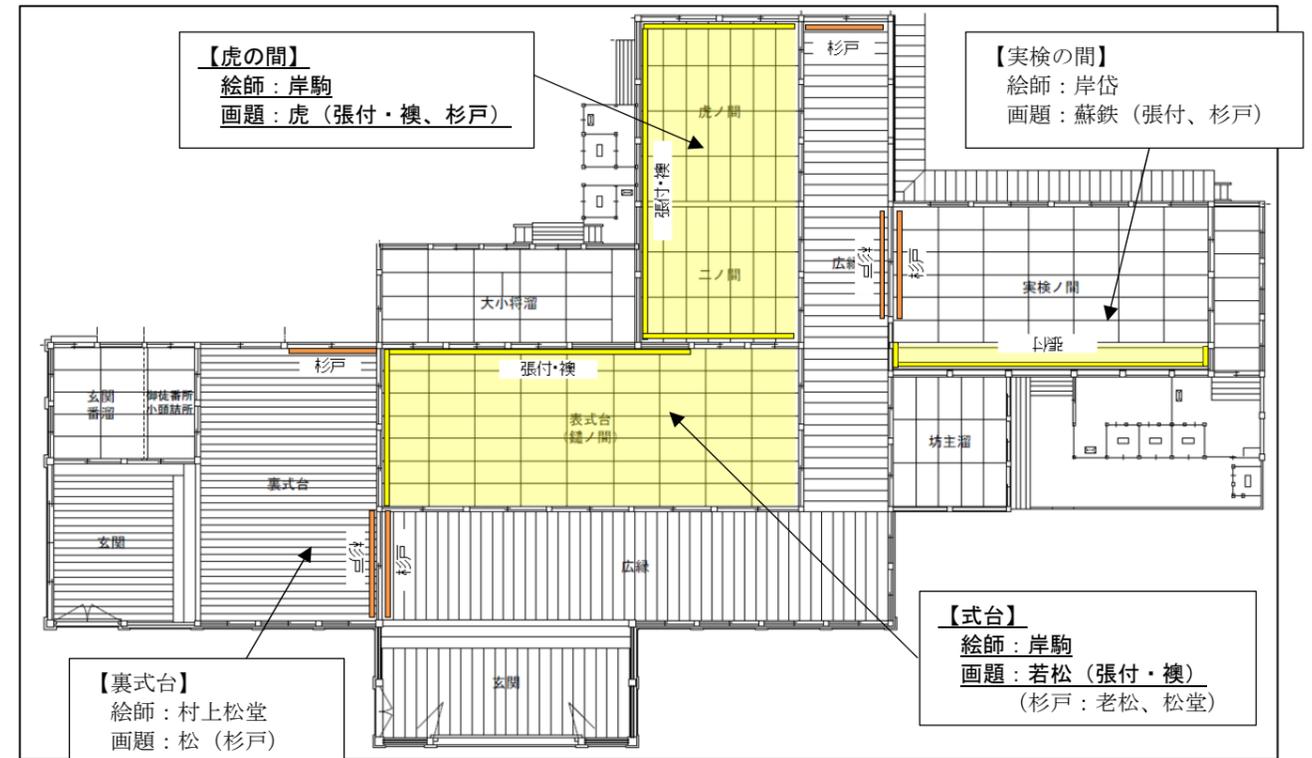
### 3) 制作範囲・対象（第1段階整備）

復元対象の検討にあたっては、関連する絵師の作品調査により得られる情報量や、復元後の利活用における位置づけなどを総合的に検討し、対象を決定する。

岸駒が虎を描いた虎の間については、文献により、張付に3匹、杉戸に2匹の計5匹の虎が描かれ、「水を飲む虎」「走る虎」「うづくまる虎」など虎の姿勢に関する情報も得られている。虎の細部表現については岸駒による現存作例を参考にし、また、構図については、岸派を継いだ息子岸岱による京都御所の虎の障壁画など、共通する虎の姿勢を描いた作例が現存するため、これをはじめとする類例作品の特徴を参考に、岸派が描く虎の構図の推定を行うことが可能である。

一方で、実検の間については、岸派による蘇鉄の作例が確認されておらず、現時点では障壁画の制作を行わないこととして整理している。

主な障壁画の配置（第1段階整備部分）



4) 二の丸御殿の障壁画に関する資料等の整理

障壁画に関する資料等の整理 (第1段階整備部分)

位置		文献から得られる情報				制作対象
		絵師	画題	仕上げ	意匠等	
虎の間	壁張付、襖	岸駒	虎	彩色、惣金	・虎の絵は計五匹、うち三匹は張付、岩木、老松等あしらい、二匹は杉戸張付等金地、水石に虎走るあり、水のむあり、うづくまるなど様々なり (二の丸御造営留帳)	制作対象とする。
	杉戸 (実検の間境)			彩色	・虎の洞より走り出る図 (鶴村日記)	
	杉戸 (竹の間境)			彩色	・杉戸帯無し (二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形)	
式台	壁張付、襖	村上松堂	若松	彩色	・張付 惣金若松 唐紙 若松、無地金等 (二の丸御造営留帳) ・小山に若松 (南部祇知書取)	制作対象とする。
	杉戸			彩色	・老松、下草、根笹、岩を取り合わせ (御造営方日並記)	
実検の間	壁張付 (床)	岸岱	蘇鉄	彩色、惣金	・岩に蘇鉄 (御造営方日並記)	資料や類例がない、または利活用動線を取り外す可能性があるため現時点では制作対象としない。
	杉戸			彩色	・岩に蘇鉄 (御造営方日並記)	
裏式台	杉戸 (表式台境)	村上松堂	老松	彩色	・表と同様 (老松) (御造営方日並記)	
	杉戸 (大廊下境)		若松に鶴	彩色		

絵師、画題、仕上げについては、江戸後期御殿の仕様書である文献「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」の記載による。

上表から得られる情報から、絵画ごとに類例となる作品を整理し、構図等の検討作業を行う。

## 参考

### (1) 二の丸御殿の障壁画に関する資料

これまでの調査により、複数の文献・絵図から御殿各所に描かれた障壁画（壁張付、襖、杉戸、天井画）の画題と絵師に関する文字情報が得られている。また、小書院の天井画の実物が移築建築遺構と合わせて確認されている。他に、伺い下絵や写しなど、御殿に関連する可能性がある粉本資料が数点確認されている。

#### 文献

御殿の仕様書、業務日誌といえる確かな資料による情報に加え、複数の文書から、断片的ではあるが意匠に関する情報が得られている。

#### ①「二之御丸御殿内装等覚及び見本・絵形」 金沢市立玉川図書館蔵（加越能文庫）

江戸後期の御殿再建に携わった御大工である井上庄右衛門が記した御殿の仕様書といえる資料。一次資料として復元検討において信頼を置く資料である。御殿全体の全ての障壁画について、位置、張付・襖と杉戸の別、画題、絵師、仕様（彩色、惣金、墨絵など）が記載される。

この資料により、江戸後期再建時御殿の各部屋の障壁画の画題や絵師、更に「彩色」、「惣金」、「墨絵」など仕様・仕上げが判明する。

#### ②「御造営方日並記」 金沢市立玉川図書館蔵（加越能文庫）

江戸後期の御殿再建に携わった造営奉行高島厚定が記した御殿造営の業務日誌といえる資料。障壁画制作に携わった絵師の行動や、藩から支給した紙・金箔など材料、画題選定や制作作業における絵師とのやり取りなど、障壁画制作のプロセスが克明に記録される。

この資料の記載は、上記仕様書①の記載と内容がほぼ一致し、仕様書の記載内容の信頼性を高めるものである。また、当時の紙や金箔の仕様についても情報を得ることができる。

#### ③「二ノ丸御造営留帳」 石川県立歴史博物館蔵（才記家文書）（後年、才紀一才記に改名）

江戸後期の御殿再建に携わった紙細工人（表具師）である才紀仁右衛門による留帳。仁右衛門が携わった表装に関する作業過程が詳細に記録される。また、部分的ではあるが、虎の姿勢や松の配置など障壁画の意匠に関する記録が見られる。

この資料により、復元整備対象範囲である「虎の間」の障壁画の意匠に関する情報が得られる。

#### ④「南部祇知（ただとも）書取」 金沢市立玉川図書館蔵

御殿に勤めた藩士である南部氏が、明治22年に、往時の様子を書き留めた記録。儀礼空間である表向の障壁画の意匠に関する記録が見られる。

この資料の記載や③を合わせ、表向の障壁画の意匠に関する情報が得られる。

#### ⑤「鶴村日記」 白山市立博物館蔵

前田家の重臣今枝家に仕える儒学者金子鶴村による日記。文化7年5月の日記に、絵画に見識のあった鶴村が金沢滞在中の岸岱を訪ね、杉戸絵の制作風景を見たことが記録される。

この資料により、杉戸絵の虎の意匠に関する情報が得られる。

#### 絵図

#### ①「金沢城二の丸地図」 石川県立歴史博物館蔵

江戸後期の御殿の全体絵図は複数見られるが、本絵図には部屋を仕切る杉戸に描かれた絵の画題と絵師が記載される。文献①をはじめとする資料とも内容が概ね一致し、資料の信頼性を高めるものである。

#### 天井画の実物

#### ①「小書院格天井の天井絵」 中村神社蔵

明治初期に御殿から移築され、現在は金沢市内の神社拜殿となっている小書院の格天井に張られていた天井画の実物が確認されている。

この資料により、往時の紙や顔料に関する情報を得ることができる。

### (2) 江戸後期の二の丸御殿の障壁画に携わった絵師

上記資料より、江戸後期の御殿の障壁画に携わった絵師は以下のとおりであることが判明している。表向の主要部など重要な部分を担ったのは、岸駒・岸岱父子と狩野祐益・墨川父子である。また、今回の復元部分の障壁画は岸派絵師の担当部分である。

#### 岸派絵師

岸駒（越前介）	岸派の祖（京都、加賀藩出身）
岸岱（筑前介）	岸駒の子（京都）
村上松堂	岸駒門人（ 〃 ）
望月左近（玉川）	〃 （ 〃 ）
斉藤霞亭	〃 （ 〃 ）
村 東旭	〃 （加賀）
森閑材（間材）	〃 （ 〃 ）
森辰之助（西園）	岸駒門人、閑材の子（加賀）

#### 狩野派絵師（江戸）

狩野祐益（友益）	表絵師（江戸神田松永町狩野）
狩野墨川	祐益の子（ 〃 ）

#### 狩野派絵師（加賀）

梅田九栄（8代）	藩御用絵師（加賀）
佐々木泉景	藩御用絵師（加賀大聖寺）
早川泉流	泉景門人（加賀）

### (3) 関連する資料の調査

携わった絵師や属する流派に関連する粉本等資料が複数存在する。これらの調査では金沢城に関連するものが確認できている。また、構図・筆致等を検討するうえでの参考資料となり得るものである。

#### 粉本等資料

##### ①「佐々木家旧蔵資料」 個人蔵

藩御用絵師で江戸後期の二の丸御殿の障壁面に携わった佐々木泉景の家系に伝わる下絵等資料群。調査の結果、江戸後期再建の後に、御殿改修を行う際に制作された可能性がある御居間下段の障壁面「西湖」の下絵が確認された。部屋全体の障壁面の構成が把握できる貴重な資料として参考になる。

##### ②「望月家旧蔵資料」 京都市立芸術大学

岸駒の弟子で二の丸御殿の杉戸を描いた望月玉川(左近)の家系に伝わる下絵等資料群。調査の結果、「金沢」と記載のある資料が複数確認され、御殿の杉戸絵の下絵の可能性が高いものも確認された。また、制作時期は明らかではないが、虎や若松を画題とした下絵等が多数確認された。

##### ③「岸大路家所蔵「岸派資料」 栗東歴史民俗博物館寄託

岸岱の息子、岸礼の家系に伝わる粉本等資料群である。

##### ④「岸派粉本資料」 神戸・百耕資料館

資料館が収集した岸派の粉本資料である。

##### ⑤「梅田家絵画資料」 石川県立工業高等学校

藩御用絵師で江戸後期の二の丸御殿の障壁面に携わった梅田九栄の家系に伝わる下絵等資料群である。

#### 絵師の作品

現在、岸駒、岸岱の作品を中心に実見調査を実施している。岸駒の作品とされるものは全国に見られるが、調査では惣金、彩色など金沢城の仕様との共通性が見られるもののうち、当該絵師の確かな作例であることが確認できるものを対象としている。

調査対象としている主な作品

岸駒

- ・宮川祭曳山颯々館楽屋襖「松虎図」 (長浜市宮司東町自治会蔵)
- ・窠下猛虎図 (富山県朝日ふるさと美術館蔵)
- ・松下飲虎図 (公益財団法人前田育徳会蔵)
- ・虎図 (個人蔵)

岸岱

- ・京都御所諸大夫の間「虎の間」襖
- ・香川県金刀比羅宮奥書院襖「春野稚松図」

### (4) 資料調査の状況

各資料の調査にあたっては、構図や筆致等を実見する他、顔料の色確認、金箔の状態、画紙など制作に向けて必要となる事項の確認を行う。また、可能な場合は高精細な写真撮影を行い資料のデジタル化保存に資する。

# 彫刻欄間の制作に向けた検討状況

## 1. 二の丸御殿における彫刻欄間

江戸後期御殿の欄間彫刻は、「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」（以下「内装等覚」）に位置や題材、下絵作者などの情報が記載されており、彫刻欄間は12点確認できる。

■表式台玄関  
 一、唐破風虹梁之上ニ彫物椽  
 彫物 **波ニ犀** 彫物下絵 井上庄右衛門

■竹ノ間  
 一、御欄間彫物椽 格子縁檜蠟色塗  
 彫物 彫物下絵 井上庄右衛門  
 画師  
**唐松ニ鶴** 御上檀御下檀境 彩色 狩野友益  
**桐ニ鳳凰** 御下檀ニ之御間境 同 同人  
**獅子ニ牡丹** 二之御間三之御間境 同 同人

■小書院  
 一、御上檀 御下檀境御欄間彫物椽 格子縁檜蠟色塗  
 彫物 彫物下絵 井上庄右衛門  
 画師  
**藤ニ根笹** 彩色 狩野友益

■奥書院  
 一、御上檀 御下檀境御欄間彫物椽 同格子縁檜蠟色塗  
 彫物 彫物下絵 宮腰大工  
 彩色 画師江戸 奎之助  
**波ニ亀** 狩野友益

■表舞台  
 一、四方水引之上臺股之左右彫物椽  
 彫物 **老松ニ鶴** 彫物下絵 能州所口彫師 五三郎

■奥舞台  
 一、四方水引之上 臺股之左右彫物椽  
 彫物 **雲水之龍** 彫物下絵 井上庄右衛門

■御居間  
 一、御上檀御下檀境 御欄間彫物椽、格子縁椽 何茂木地  
 彫物 **波ニ兎** 彫物下絵 井上庄右衛門



は遺物がある欄間を示す。

■広式対面所  
 一、御上檀 御下檀境御欄間彫物椽 彫物格子縁檜蠟色塗  
 彫物 彫物下絵 井上庄右衛門  
**波ニ菊** 彩色 画師 狩野友益

■唐門  
 一、頭横ト虹梁トノ間イハメ板之所彫物椽  
 彫物 **波** 彫物下絵棟梁 八郎兵衛  
 一、虹梁上唐破風下 太平短左右彫物椽  
 彫物 **雲水龍 阿吽** 彫物下絵棟梁 八郎兵衛

※枠内の記載は「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」〔第一分冊〕金沢城調査研究所より

## 2. 史資料

### 1) 彫刻欄間の遺構

#### ■「中村神社拝殿」(旧奥能舞台の遺物)

中村神社拝殿は金沢城二の丸御殿の奥能舞台を明治3年に卯辰山招魂社へ移築、昭和40年に現在地へ移築した建物。

外部南面正面



内部南面



#### ■「尾山神社東神門」(頭貫と虹梁間の彫刻欄間「波」、虹梁の上彫刻欄間「雲水龍」)

明治3年に卯辰山招魂社神門として移築されたものを昭和38年に現在地に移築したもの。



### 2) 彫刻欄間の類例

#### ■気多神社本殿(1787 羽咋市 国指定重要文化財)

気多神社は前田利家や前田利常より社領を寄進されており、1787(天明7)年の気多神社の社頭造営では前田重教(10代藩主)の「厳命」で、「普請手伝」として八家筆頭である本多政行が関与し、建てられたとされている。本殿向拝の彫刻欄間には「波」、「犀」と思われる彫刻欄間がある。

本殿は1787(天明7)に建てられており、二の丸御殿再建時期に近い。下絵の作者、彫師は確認されていないが、表式台玄関の「波二犀」の下絵を描いた井上庄右衛門が本殿の棟梁大工の一人として携わっていたとされている。

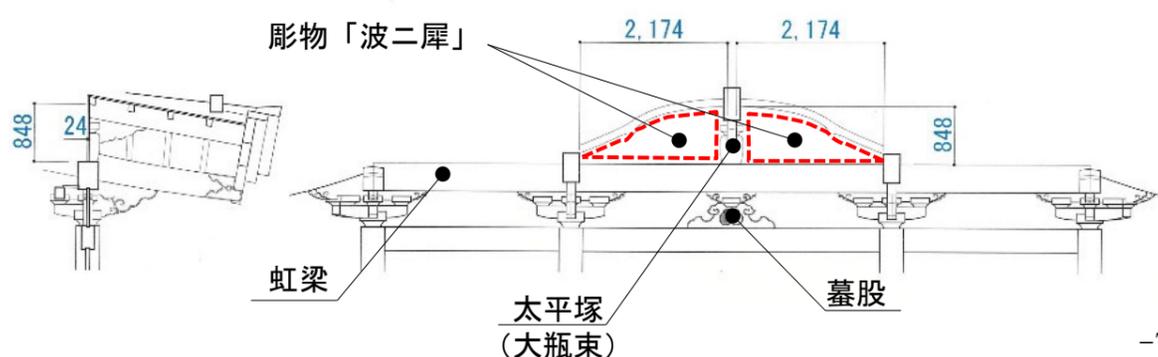
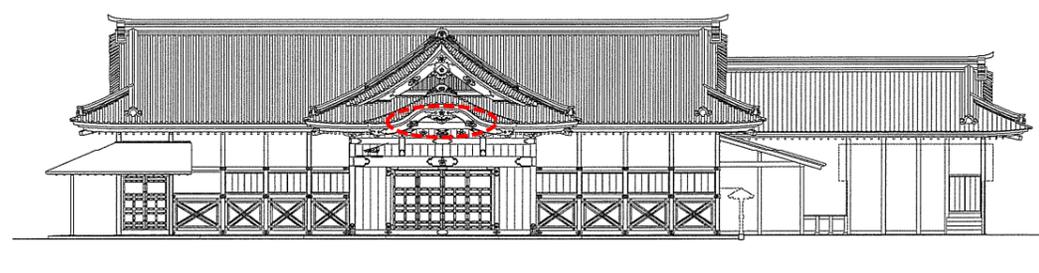
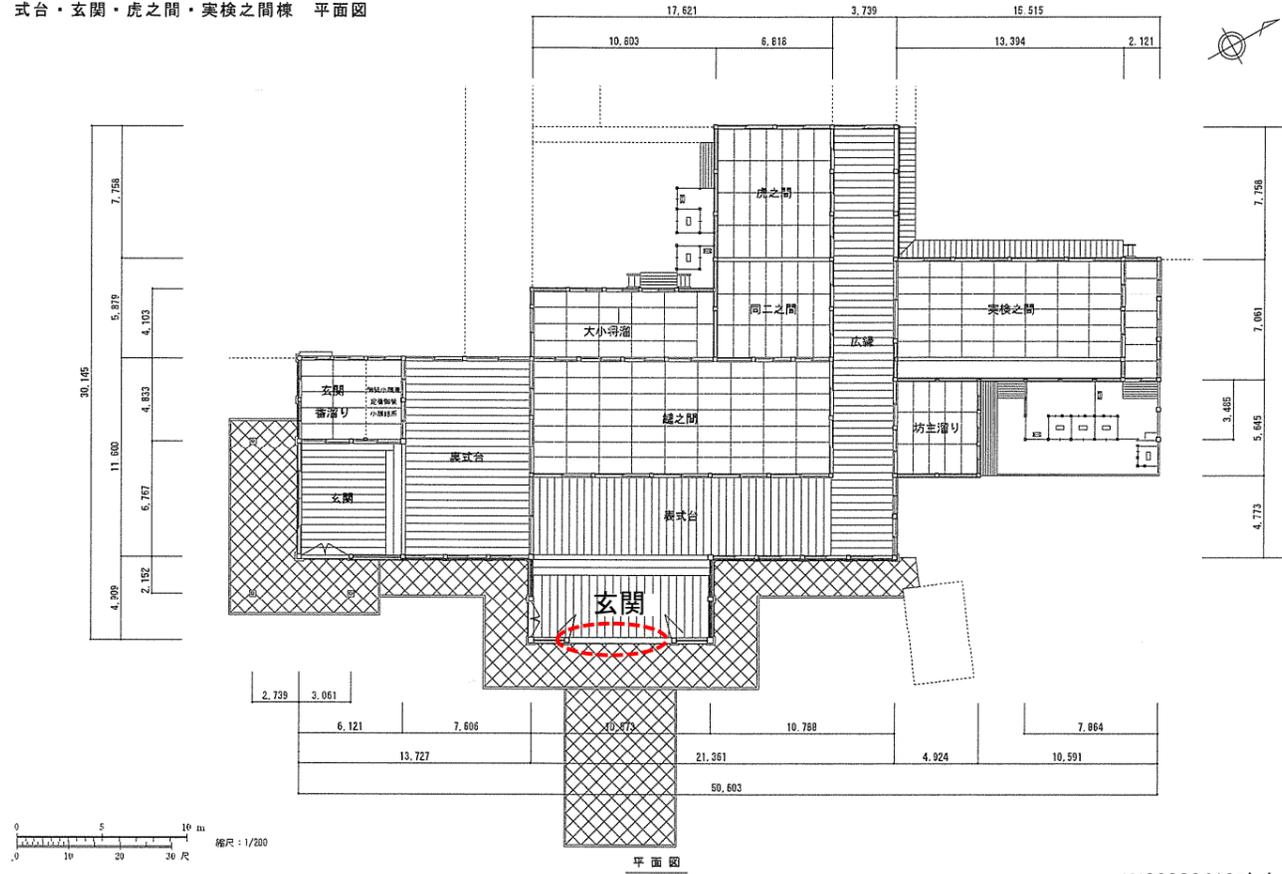


### 3. 第1期整備範囲の彫刻欄間

第1期整備範囲は、表式台玄関、鐘之間、実検之間、虎之間、裏式台などであり、この範囲にある彫刻欄間は表式台玄関の唐破風にある「波二犀」である。

#### 1) 位置及び大きさ

式台・玄関・虎之間・実検之間棟 平面図



#### 2) 図様の推定の方法

「波二犀」については、遺構、下絵、写真などの資料は確認されていないため、他の欄間遺構や文献等の資料から得られる情報に基づき、図様を推定する推定復元を行うこととする。同題材、同時代、同地域などの類例を調査し、構図や仕様の特徴について検討を深めることで精度を高める。

